

2024年2月25日

わたしのもとに来なさい

マタイによる福音書第11章28～30節

・人生の重荷

今日の聖書箇所、まずイエス様は「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい」と言われています。「疲れた者、重荷を負う者」と聞いて、他の誰かの話だなあとと思われるのではないかと思います。この言葉は、そのまま私たちの姿であるとお感じになられるのではないかと思います。私たちは、何の問題もなく人生を歩んでいるわけではありません。自分の健康のこと、家族のこと、様々な場での人間関係のこと、仕事のこと、人生の歩みの中で様々な重荷を背負って歩んでいるのです。その重荷を抱えて、あえぐようにして歩んでいる、時には疲れ果ててしまうこともある、それが今の私たちの姿ではないかと思います。このイエス様の言葉は、何より私たち一人一人の姿を非常に率直に示しています。「重荷を負う者」とありますが、これはその人が「よし、この重荷をがんばって背負っていこう」として歩んでいる、そういう姿を言っているわけではありません。むしろ「負わされてしまっている重荷」ということなのです。

私たちが負わされている重荷、それは人生の中にある一つ一つの課題や困難も勿論含まれるでしょうが、それ以上に、私たちが人生を生きることそのものを指しているのではないかと思います。私たちは時に人生を歩むことそのものが、非常に重く感じています。その時、抱えているものを全部投げ捨ててしまうことが出来れば、どんなに楽だろうか。そう思うことがあるのではないかと思います。私の人生を生き切っていくということは、決して簡単なことではなく、何とか耐えていくことように見えるのです。時に、歩いていくことが重く感じられてしまうのです。そこで行き詰っている、それがイエス様の「疲れた者、重荷を負う者」という言葉によって明らかにされる、私たちの姿ではないかと思います。

その私たちに向けてイエス様は、「あなたがたを休ませる」また「安らぎが与える」と言われます。重荷を抱えて歩む私たちには、「休み」が必要なのです。そうでなければ私たちは歩いていくことができないのです。今、世の中は働き方改革で、以前に比べてはるかに休暇を取りやすくなったとよく言われます。そのように、働きを続けるためには、休暇や休息が必要ではないか、そういうことをイエス様はここで言うのでしょうか。ここでイエス様が言われる「休み」とは、休暇や休息を取るといふ程度のことではありません。例えて言えば、砂漠を旅していて、のどが渇いて一

歩も進めないような状態になってしまった、その時にオアシスに行き当たる。そして、そこで水を飲んで「ああ生き返った」、そして、息を吹き返していくような姿です。困難な旅路を、また歩みを続けていくことができるような力が与えられていくということなのです。つまり、「本当に重荷に満ちている人生を歩いていく中で、疲れ果てて自分の力ではもう一歩も歩めなくなるような限界の時がやってくる、その時こそ、あなたには全く新しい力が与えられていくことが必要だ」と、イエス様は語りかけておられるのです。

では、その新しい力は一体どこで与えられるのでしょうか。私たちが息を吹き返していくオアシスとは、一体どこにあるのでしょうか。イエス様は明確に、「わたしのもとに来なさい」と言われます。更に「休ませてあげよう」と言われています。「この私があなた方を休ませてあげよう、人生を歩いていくための本当の力を与えよう」と言われている。「疲れ果てたら、歩むことがしんどくなったら、立ち止まってしまったら、とにかく私の許に来なさい。誰であっても、私があなたに新しい力を与える」、そうイエス様は言われているのです。イエス様の許こそ、私たちが人生を歩いていくためになくてはならない力を得ていく場所であるということなのです。

・イエスの恵みに生きる

イエス様の許へ行くことを、イエス様はこう言われています。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。」、イエス様のくびきを負って、イエス様に学ぶ。その時にまことの安らぎを受ける。そう言われているのです。くびきとは、家畜に物を引っ張らせるための体にかける器具です。当時は二頭立てで引っ張らせるのが通常でした。そして、このくびきは、何か偶然ついているというのではない、飼い主がその家畜に仕事をさせるために負わせているものなのです。つまり、くびきを負っているということは、その家畜には飼い主・主人がいるということの意味します。「私のくびきを負う」とは、「あなたは私という主人のくびきを追いなさい」とイエス様は言われているのです。つまり、あなたの人生の本当の主人は私であることをまず受け入れなさいと、私たちに向かって語られているのです。

このことは立ち止まって考えて見ますと、大変不思議な言葉だと思いました。家畜に対する飼い主であれ、奴隷に対する主人であれ、家来に対する王様であれ、自分の人生を左右するそういう存在を持つということは、時にとっても理不尽なことを強いられる、むしろ安らぎなどということとは遠く離れてしまうのではないか、そう思うのです。主人を持つということは、決して休みが与えられないで働くことになる、安らぎとは逆になっていくように思います。むしろ、そういう存在がなくなることこそ、

自由に生きることではないかと思うのではないかと思います。しかし、本当にその認識は正しいでしょうか。

そのことについて、深く考えさせられるイエス様の一つのたとえがあります。それは、こういう譬えです。ある家に兄弟がいました。弟は、父に願うのです。「あなたが死んだら兄弟で受け取る財産の半分を、私に今ください。」父は弟の驚くような願いを受け入れ、財産の半分を与えてやりました。弟は、直ぐにお金に換えて遠い町へ行き、そこで思いっきりお金を使って、楽しく生活しました。しかし、お金も限りがあります。ついにお金が底をついてしまいます。それで、弟は当時の人たちが最も忌み嫌った仕事をするようになってしまったのです。そこまで行って、弟は気が付くのです。自分はなんと愚かなことをしてきたのかと。それで、父の家に帰って謝って、奴隷の一人として雇ってもらおうと思います。しかし、父は、のこのこと家に帰ってきた弟に遠くから走りよって、弟を抱きしめ、「奴隷に」という弟の言葉を遮って子として迎え入れ、帰ってきた祝いの時を持った。そんなたとえなのです。

弟は、町へ出ようと思いました。彼は自由に生きたいと思ったからです。父の許から離れたら、自由で自分らしい歩みが出来ると思いました。結果どうなったのでしょうか。彼が最初思いもしなかった、本当に不自由なところにはまり込んでしまったのです。そして、彼は父の許にいる時は制約があって、不自由のように見えていましたが、実は自分らしく生きていた、そのことを発見させられたのです。彼にとっては、父がいるということがどんなに大切な意味を持っているのかということなのです。弟は、町で行き詰っていました。それは、本来生きるべき場所、父の家から離れてしまったからでした。そして、道を見失っていたのです。それが、自由に生きたはずの弟が陥った場所だったのです。

私たちは、困難な状況の前に立ちます。その時、勿論抱えている困難の苦しさもあります。しかし、どう歩んでいったらよいか分からない、生きる方向を見失った状態、それは、直面している困難以上に、私たちを苦しめている、私たちが抱える本当の問題ではないかと思います。このようにして、生きる方向を見失った状態を、聖書は「罪」と言っています。「罪」とは、人間の悪い部分というよりも、イエス様のたとえの弟のように、本来生きるべき道を見失っている状態を指します。ですから、罪から救い出されるとは、本来生きるべき場所に帰ることなのです。どうしても本来歩むべき場所に戻らなければならないのです。弟が父の家に帰ったように、イエス様の許へ帰る。イエス様の許を歩む、つまり、イエス様という主人の許へ帰って、生きていく。それは、確かに、自分の人生は自分のもので、自分の思いのままに生きていってよいのだということから離れる歩みです。それは不自由になって、制約が多くなって、安らぎ

とは離れていくように思えますが、むしろ逆なのです。本当の意味で自分らしく生きる道、本当の安らぎを得て歩む道なのです。

・主人の心を知る

イエス様という主人の許に行くことが、どうして安らぎを得ることになるのか。そのことを受け止めていくために、どうしても確認する必要があることがあります。それは、私たちの主人であるイエス様が、どういう心を持っているのかということです。理不尽な主人もいます。素晴らしい主人もいます。それでは、私たちの主人イエス様はどんな心を持っているのかということなのです。イエス様という主人がどういう心を持っているのかを受け止めることが、まことの安らぎを得、新しい力を与えられていく道だと言われています。

イエス様は、こう言われています。「わたしは柔和で、謙遜なもの」と。まず「柔和」という言葉があります。これは、聖書の言葉では、独特の意味を持つものです。「相手の立場に立って行動をする」という意味です。実際にそうして行動するということなのです。主人であるイエス様が、私たちのことを真に心に留めてくださるのです。「あなたという僕の責任を、私どこまでも負う」そうイエス様は決意され、それを必ず実行してくださるということなのです。ですから、私たちがイエス様という主人を与えられるということは、私たちの人生の最後の責任を、イエス様という主人が必ず負ってくださるということなのです。どんな時であっても、どんな状況の中にあってもです。そうして私たちは、イエス様という主人によって全責任を負われて歩いていくのです。

そして「謙遜」、単に低くなっているというだけではなく、「神様の意思を受けて低くなる」ということです。「謙遜な者」という言葉に、イエス様というお方の姿を言い尽くされていると思います。イエス様は、天の座にお座りになっておられる方だったのです。しかし、その座を捨てて、私たち人間の世界にお生まれくださいました。あの12月に祝うクリスマスの時に起こった出来事でした。天の座を捨てて、一人の赤ちゃんとなり、この世にお生まれになりました。そして、その生涯の最後に、捨てられるようにして十字架にはりつけになり、命をお捨てになられたのです。イエス様が神様の御意思によって低くなるということは、そこまで徹底していました。それは人間のためにです。そして、人間のためとは、人間一般のためという意味ではありません。「私のため」であり、「あなたのため」なのです。私のために命を捨ててくださる、そこまで徹底した愛で、私たちは愛されたのです。

なぜ、イエス様は人として歩まれて、十字架にはりつけになられて、命までお捨て

になったのでしょうか。聖書にはこういう言葉があります。「神は独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。(Iヨハネ手紙4：9)」、「独り子」とはイエス様のことです。神様は、イエス様を世にお遣わしになられました。それは、このイエス様によって私たちが生きるため、真実に神様の許で生きるためとされています。私たちは、たとえの弟のように、神様に背を向けて歩んできました。ですから、神様に受け入れていただいて生きる資格はないように思えるのです。しかし、神様は私たちを受け入れたいと願われて、私たちと神様を隔てる罪という壁を打ち壊されたのです。神様と共に歩む道を、イエス様の命をもって開いてくださったのです。

イエス様は私たちを新しく生かそうと決意されて、神様のところ、天まで来なさいと言われるのではなく、私たちのところ、人間の世界まで来てくださって、私たちの手を取って、引き上げてくださるのです。私たちの手をとるためには、私たちが歩んでいる場所まで来てくださることがどうしても必要だったのです。イエス様は私たちを高めからご覧になって、ちゃんと歩んでいるだろうかと査定するような目で見ておられるわけではありません。人生の荒波に飲み込まれて、息も絶え絶えになっている、今にも沈みそうになっている、そういう私たちを救うために、私たちの人生の荒波の中に、天から飛び込んでくださったのです。そして、命を捨てる思いで、私たちの手を取り、私たちを救いの岸へと引っ張って行ってくださったのです。そして、実際に命を捨てられたのです。その命を捨てられたことによって、私たちが救いの岸へと到達することができたのです。

イエス様は「私は柔和で、謙遜な者」と言われます。イエス様は、私たちに仕え、どこまでも私たちの人生の責任を負ってくださる、そして、様々なことに行き悩む私たちを支えるために、全てを捨てて、人間の世界にお生まれくださった方なのです。そのイエス様が私たちの主人なのです。つまり、私たちは一人ぼっちで人生の旅路を歩んでいるのではないのです。私たちがどこまでも支える、どこまでも導く、そう決意してくださっている方に支えられて生きているのです。

・困難の持つ意味

ここまで見て来まして、イエス様が私たちの人生の全責任を負い支えてくださることを受け止めて歩み出していく時に、最後にどうしても心に残る問題があるのではないかと思います。それは、何故私たちの人生には様々な困難があるのかということです。思い悩むことが多くあります。どうしてそういうものがあるのだろうかということです。主人であるイエス様が愛してくださっているならば、どうして困難に直面す

るままにされるのだろうかと思います。いろいろな困難に直面しながら歩んでいます。そうすると、そのような困難の中を歩いて行く私たちは、イエス様に愛されていないのでしょうか。勿論そうではないのです。

イエス様は、ここでこう言われています。「わたしの軛は負いやしく、わたしの荷は軽いからである。」と。くびきは、やはり重さがあります。そして、実際に家畜にはやはり負担がかかるのです。しかし、それは家畜を苦しめてやろうと思って、飼い主は家畜にくびきを負わせるのではありません。くびきは荷物を運んだり、畑を耕したりそういう目的のために家畜にかけられたのです。目的がある。このくびきには、目的があって、主人は家畜にくびきをかけるのです。しかも、そのくびきは「負いやしい」とは、その家畜にきちんと合わされたということです。相応しいくびきなのです。だから負いやしいのです。つまり、その家畜を苦しめるためではなく、それによって飼い主の目的をなさせていく。そのためのくびきなのです。

更に「わたしの荷は軽い」とあります。この「荷」とは、前に出てくる「重荷」とは違って、元々は船など「積荷」を表す言葉です。積荷ですから、それは一つ一つ必要がある荷物なのです。そして、それは軽いと。私はここで考えさせられたのです。この「軽い」とは、結局重量の問題ではないのではないかと思ったのです。

このことを考えていまして、思い出したことがありました。前任の教会には幼稚園があって、私も園長として関わらせていただきました。その幼稚園では、例年1月にお餅つきをしていました。ある時、お餅つきのために、園児の関係者がもち米を30キロ寄付してくださったことがあります。30キロですから、かなりの重さがあります。けれども、ああこのお米で子ども達が来週お餅つきをしようと思うと、決して重たくてしんどいというだけではない思いもしました。そうして、もち米を運んだ時のことを思い出したのです。もし、この袋に入っているのはただの30キロの石です、運ぶ意味は特にありませんということになれば、その30キロは非常に重く感じるだろうと思います。もち米とただの石、同じ30キロでも全く違った重さを感じると思います。

イエス様が「わたしの荷は軽い」と言われたのも重さが軽くなるということではなく、この荷物を担って歩いていくことが決して無意味ではない、意味があることだということなのです。人生の重荷を背負っていく、それは決して無意味に苦しんでいることではないと言われているのです。その荷の持っている意味は、その時には分からないかもしれない。けれどもそれが分かる時が必ずやってくるということなのです。

関係しているある教会の方が、若い頃人間関係で深く傷つくことがあった、けれども、そのことをきっかけとして神様に会うことができたとお話されていました。その方にとって、人間関係に苦しんだことは決して無駄なことではなく、神様と出会

う大切な道筋だったのです。

私たちの人生は様々な重荷で満ちています。もう担いきれないと思います。その私たちに、イエス様は、あなたのその荷を私が一緒に担っていると仰ってくださるのです。そして、あなたには今は分からないその荷を担って進んでいく意味は、私が知っていると言われるのです。先の見えないあなたの人生の旅路の到達点を、私はちゃんと見ていると、イエス様は言ってくださるのです。だからこそ、人生に行き詰る時に、重荷に耐えかねて疲れ果てている時に、「わたしの許に来なさい」と呼びかけてくださるのです。イエス様の口から改めて「私はあなたの主人として、あなたと共に歩いていく、あなたの背負っているものは私の荷だ」、この言葉を聞かせていただく。その時に、もう一度立ち上がっていく力が与えられてくるのです。イエス様の許にこそ、私たちが息を吹き返していく場所がありますし、ここで与えられていくものが、人生を歩み抜いていく本当の力なのです。その恵みの道を、ご一緒に歩いて行きたいと願います。